

社会調査における品質管理の方法

——訪問面接調査員の実査管理を中心に——

立教大学 村瀬洋一

1 目的

近年、人々の権利意識の高まりや一人暮らし増加等のため、統計的社会調査の回収率は低くなる傾向がある。回収率が5割に満たないようなデータは偏りが大きく問題である。しかし少人数への聴き取り調査はあまりにも視野が狭いし、実験的データや、インターネット調査に頼る研究は、データの代表性という意味で問題が大きい。多くは無作為抽出ではなく、謝礼を目的に登録している人を対象としており、働き盛りで忙しく収入が安定している人は少ない等の偏りがある。そのため、厳密な無作為抽出を行った社会調査とは結果が異なる。社会を正確に把握したいならば、コストがかかっても、面接法による社会調査の、実査管理の経験を蓄積することこそが重要である。現実には調査会社に全面的に委託した調査も多いが、これは調査現場の状況を把握できない。研究者が直接調査を管理することは不可欠である。しかし調査現場でのこつや、調査員の訓練、実査管理については各種の文献を見ても記述がほとんどない。原・海野(2004)巻末「調査員の手引き」が参考になる程度である。本研究は、社会調査の実査管理における、適切な方法と問題点について検討する。

2 方法

筆者が参加したいくつかの全国調査や、震災後の意識調査などの実施経験に基づき、調査実施のいくつかの段階と、実査管理の注意点や工夫すべき点を整理しとくに重要な内容について指摘する。

3 結果

実査時にすべき事としては1)予算確保など事前準備、2)他の研究者や行政など周囲への相談、3)無作為抽出、4)予備調査実施、5)調査対象者への説明(適切な依頼状作成)、6)調査員への説明、7)実査時の調査員体制、8)回収後の作業と、大きく8段階を挙げることができる。調査に限らず品質管理とは、組織全体の意欲をいかに維持し、目的を共有するかが重要である。しかし組織が大きくなると、調査目的とその重要性を全員が理解し志気を維持することは難しいが、この点がかつとも重要である。また、適切な「調査員手引き」を作らなくてはならない。調査員へ指導すべき点として、1)対象者が留守でもあきらめず、繰り返し訪問する、2)しかし勝手に調査対象者を補充してはいけない。回収率を水増ししないことの意味を理解する、3)対象者との対応の仕方について手引きをよく読み、いくつかの注意点(最初の挨拶、インターホンを押してから数分待つ等)を理解する、4)強引に回収してはいけない、対象者の方への感謝の気持ちを忘れない、5)しかし、高い回収率を得るように努力する、回収期間の金曜～日曜まではすべて調査地点に滞在し、繰り返し訪問する、とくに、日曜夕方や夜に繰り返し訪問することは重要であること、などがある。また、管理役の研究者が数名で、何度か各調査地点を巡回し、問題点を把握して励ますことや、途中経過の回収率が低い地点には応援役の調査員を配置することなどが必要である。粗品の使い方、調査時期の配慮、予備調査実施、宛名書きをする場合は手書きとする等も重要だが、これらが不十分で回収率が低い調査も現実には多い。とくに、調査対象者の不信感への配慮は重要である。なお方言が得意で、大人しく控えめな印象の調査員の方が回収率が高いことは、経験的には分かっている。

4 結論

実査で工夫すべき点として、調査員が無作為性の意味や調査方針を理解し志気が高いことがとくに重要である。また、現場での注意点を整理し経験を蓄積することが研究のためには重要である。実査時の訪問票の工夫等は、発表当日にいくつかの資料を配付する。

参考文献 原純輔・海野道郎. 2004. 『社会調査演習 第2版』東京大学出版会.

注 本研究は文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)26380655(代表村瀬)の助成を受けた。また、立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)[東日本大震災・復興支援関連研究]の助成を受けた。